

# テーブル連続小説 歡喜の歌

## 第10話 「感傷的の事」

「まるで、恵まれていない人間は喜ぶなどでも言いたげじゃないか。まあ、僕はそういうのってはじめから知っていたけど」

「あなたは……、またそんなことばかり言ってる」

僕が今日まで生きてきて嫌というほど思い知ったこの世の現実を言ってる聞かせたら、君は呆れたような顔してため息をついた。想像通り、君はいつもそう。僕のような不遇で、無才で、まるで忘れられた無人島のような人間なんか地球上に存在しないとも言いたげに堂々胸を張って生活をし、それでいてこんな失敗作のような僕にも救いの手を差し伸べてやろうなんて、御高尚なことを考えておいでだ。

「たかだか歌の文句でしよう。真に受けてどうするのです」

「そのたかだか歌の文句にさえ苦痛を受けるほど、僕という人間は矮小なんだ。放っておいてくれよ」

「自分で決め付けないでください」

十二月になると必ず耳に入る歌がある。通称『第九』と呼ばれるその歌は、この国では年末が近づくと歌われる機会が増える。みんな嬉しそうに歌っているが……歌詞の内容の暴力性に気づいていないのだろうか？歌っている人たちは知らないのかもしれない。あなたたちは笑顔で『優しい妻のいる者、信じあえる親友のいる者は歡喜の声を上げよう！持っていない者は涙を流しひっそりと立ち去る！』——こんなことを言っているんだぞ。自覚はあるのか？全く……あの笑顔と歌声の力強さは目の前の君の眩しさと同じだけ僕を痛めつける。

「日陰の人は永遠に日陰の世界にいるしかないっていうのに」

「歡喜の輪に入りたいのでしょ？だったら作ればいいのです。貸して下さい」

勝手に僕のスマホを奪い、操作し、**LINEを起動してQRコードを読み取り**始めた。

「何するんだよ？」

「友達登録です」

「僕には必要ないよ。だいたい友達なんて」

「おや、知らないのですか？今北海道三菱の**LINE@と友達**になると**十二月限定で五百円値引き**に使えるクーポンがもらえるんですよ。その他にも**お得な情報が随時配信**されますし、友達になって損はないと思いますよ？」

「……友達を利用して言うのかい」

「日向の世界はギブアンドテイクです。もちろん、私の唯一のお友達のあなたと私もですよ」

「え……何だよそれ」

不思議な恥じらいに圧倒されて得意の悪態も上手に出なくなる僕。照れたそぶりもなく、呼吸並みに自然な振る舞いでこなす君。これが陰・日向の違いか。

「さあ、行きましょう。歡喜の歌を聴きに」

「どこへ？」

「北海道三菱小樽店の、スペシャルサンタセールです。話題の新型車・エクシプスクロス**のAR商談体験**をして**アンケートに答えるとドーナツがもらえる**のです」

「やれやれ。君も現金だなあ」

「ふふふ。頼れるのは心よりも、そういったものですよ」

僕も愛車に乗って行こう。五百円とはいえ、時々恵まれた人間ぶってみるのも面白い。

つづく



分かち合わせて。

**友達になって  
500円クーポンゲット！  
是非登録を！**

**LINE@**  
はじめました！

お友達募集中！お得な情報をLINE@でお届け